

差別・偏見論の古典『スティグマ』を読み解いて応用する

出典：薄井明『『スティグマ』というエニグマ』誠信書房

◎ゴフマンが初めて理論化した「スティグマの社会学」

カナダ生まれでアメリカで活躍した社会学者アーヴィング・ゴフマン(1922-82)は、『日常生活における自己呈示』（国際社会学会が選定した「20世紀の社会学で最も重要な著書10冊」の1冊）の著者として世界的に知られる。『スティグマ』（1963年刊）はこれに次ぐゴフマンの主著である。

「スティグマ(stigma)」という言葉は古代ギリシャに起源をもち、元々「奴隷・罪人に刻印された焼き印」を指した。現在この語は、単なる偏見を超えた、ひどい差別を生み出す「非常に否定的なレッテル」の意味で使われている。肢体不自由の人、ハンセン病患者、全盲の人、精神病患者、前科者、同性愛者、戦前の欧米におけるユダヤ人など「スティグマが貼られた人たち」の社会生活に関して、ゴフマンは「スティグマが生じる構造的な前提条件」を解明しようという意図から著書『スティグマ』を執筆した。

◎断片的にしか理解されてこなかった著書『スティグマ』

出版当初から注目を集め、差別・偏見の社会学では「古典」として扱われるようになった『スティグマ』だが、その叙述内容や論理展開の難解さ、そして日本では翻訳上の問題が相まって、この著書は長年正確に理解されることがなかった。著書『スティグマ』に言及してきた研究は膨大な数にのぼるにもかかわらず、そのほとんどは、スティグマの「定義」や「3類型」など、この著書の叙述内容の一部に集中してきた。しかし、ゴフマン著『スティグマ』は、言及されてこなかった箇所にも興味深い考察や鋭い分析が詰め込まれた、分析視角や概念の「宝庫」である。

◎ゴフマンが展開した「スティグマをめぐる相互行為論」

緻密な対面的相互行為の描写で知られるゴフマンは、『スティグマ』において、当該人物のスティグマがノーマルな人たちに知覚されたり知られたりしている状況とスティグマが隠されている状況とに大別して、「スティグマが貼られた人」と「ノーマルな人」の対面的相互行為をきめ細かく分析している。前者の状況では「緊張の管理」をめぐる多様なやり取りを、後者の状況では「情報コントロール」をめぐる諸種の方策を、それぞれ詳細に考察している。また、ある種のスティグマが貼られた人と同種の同じスティグマをもつ人たちとの関係、彼らの家族員との関係、ノーマルな人たちのうちスティグマに寛容な立場の人たちとの関係などを論じる一方で、スティグマのスティグマ性を否定しノーマルな人たちに異議申立てする人たちの運動やノーマルな人たちに受容されることを最優先する人たちの対人関係・集団関係とその問題点を指摘している。スティグマをめぐる相互行為の「ほぼあらゆる面」を本書で取り扱っているといってもよい。そして、最後の箇所ではゴフマンは「スティグマ」問題の核心を、「関係概念としてのスティグマ」「パースペクティブとしてのスティグマ」という視点から、さらに深い次元で捉え直している。

◎現代日本社会の分析にも有効な著書『スティグマ』

ゴフマン著『スティグマ』は1960年代初頭までのアメリカで「スティグマが貼られた人たち」が置かれた対人社会的状況を扱った著作だが、そこで彼が行った分析は、現代日本で「スティグマが貼られた人たち」とされる、たとえば元ハンセン病患者とその家族、精神障害者、「被差別部落」出身者のほか、糖尿病や肺がん患者など特定の慢性病患者、顔のアザや脱毛症等「見た目問題」を抱えている人たちが置かれている対人社会的状況を考察する上でも、分析の有効性を失っていない。さらに、この視角は「ノーマルな人たち」の「恥ずべき特異性（劣等コンプレクスを感じる諸属性）」をめぐる対人社会的状況（恐喝や詐欺を含む）にも応用可能である。

（詳細ページへのリンク：<https://www.hanmoto.com/bd/isbn/9784414501117>）